

## 黙示録6章2節 「戦争をもたらす平和」

### 1A 白い馬

1B もう一つの白い馬

2B 平和の後の災い

### 2A 戦われる主

1B 剣をもたらす方

1C 平和を妨げる結びつき

2C 真実な平和

3C みこころに従われる方

2B 悪魔の支配する世

1C 罪の中の死

2C いのちの支配

### 3A 子羊による封印

1B 偽りによる裁き

1C 不法の人の現れ

2C 偽りへの信頼

2B 福音の真理への愛

## 本文

黙示録 6 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、黙示録 5 章まで来ていました。午後礼拝で 6 章を一節ずつ見ていきたいと思えます。今朝は、2 節に注目します。「**私は見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている者は弓を持っていた。彼は冠を与えられ、勝利の上にさらに勝利を得るために出て行った。**」

みなさんは、「終わりの始まり」という言葉を聞いたことがありますでしょうか？ 終わりが、唐突にやって来るのではなく、多くは、一定の期間を経て、じわじわと「終わっていく」ものです。その終わりが始まったという意味で、「終わりの始まり」と言います。私たちが今、読んだところは、まさに「終わりの始まり」の幻です。

私たちは、前回、天における、大歓声の幻を読みました。天に神の御座があります。そして、神が右手に巻物を持っており、その封印を解くのにふさわしい者として、屠られた子羊が出てきました。十字架につけられたのですが、三日目によみがえられた、私たちの主イエス・キリストです。この方が巻物を受け取って、それで天に大歓声がありました。そして、子羊が第一の封印を解きました。すると出てきたのが、白い馬です。これが、終わりの始まりのしるしであります。

## 1A 白い馬

### 1B もう一つの白い馬

白い馬に乗っている人は、だれでしょうか？多くの人が、「イエス・キリストではないの？」と答えます。再臨の時に、天から、白い馬に乗ってこられるキリストの姿が、絵に良く描かれていますね。それは 19 章に、そのクライマックスの幻があるからです。「19:11-16 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確かで真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた。13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。14 天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方である。また、全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。16 その衣と、もものところには、「王の王、主の主」という名が記されていた。」

けれども、その姿が、ここ 6 章 2 節にあるものと、少しずつ違うのです。ここ 2 節には、白い馬に乗っていて、弓は持っているけれども、矢筒がないのです。武器は持っているようで、肝心の矢がないのです。それに対して、19 章のイエスの再臨の姿は、口から鋭い剣が出ていて、それで諸国の民を打っています。それから、19 章のほうは王冠が多くありますが、6 章 2 節の冠は、スポーツ選手が優勝した時に受け取る冠です。似ているようで、違う人物であることがわかります。

### 2B 平和の後の災い

弓だけをもって、それで勝利から勝利が与えられているとされています。イエスご自身が、剣をもって諸国の軍隊を滅ぼされるという、暴力的な勝利であるのに対して、この 6 章の人物は、矢をもたずに勝利を少しずつしていきます。どちらが平和的でしょうか？明らかに、ここ 6 章に出てくる人物のほうが平和的ですね？

しかし、ここからが、ものすごく大事です。天から全能の力をもって介入して、諸国の軍隊を一気に滅ぼす、戦うために白い馬に乗ってこられる方は、戦いをやめさせます。恒久的な平和が訪れます。千年の間の、正義と平和の統治があり、その後、新しい天と新しい地が造られて、永遠の平和が続きます。こちら、平和な姿で白い馬に乗って勝利していく人は、この後、どうなるか分かりますか？次に、「火のように赤い馬」が出てきます。それは、戦争をもたらすからです。次は、黒い馬です。物価の高騰です。それから、青ざめた馬です。地上の四分の一が死にます。

このようにして、戦われて永遠の平和をもたらす方が一方でおられて、平和をもたらしているようで、戦争と混乱、死をもたらしているのです。これが、今朝のメッセージ題になっている、「戦争をもたらす平和」です。まことのメシア、世を救う方は、戦うことによって平和をもたらされます。

その反対、反キリストは、平和をもたらすことを約束して、世界に戦いと荒廃をもたらします。「Ⅰテサ 5:2-3 主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。」反キリスト、あるいは不法の人の現れで、終わりが始まります。「Ⅱテサ 2:3 どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。」

## 2A 戦われる主

平和を求めるのが、神のみこころではないか？戦うなんて、とんでもないことだ！と思う人がいるかもしれません。しかし、すべて、どんなことがあっても平和が正しいという考えの背後に、実は、とてつもない災いをもたらす種があるのです。

それは十字架抜きの平和なのです。十字架は、暴力の手段です。人を殺す道具です。しかし、キリストがそこで殺されたことは、何を意味しているのか？それは、私たちの罪が、そこでキリストにあって殺されているのです。私たちは、自分のうちにある罪こそが神に敵対しています。それを、神がご自身の御子のうちにその敵対を置かれて、私たちと和解しようとしておられます。その和解を受け入れることによって、初めて、私たちの罪が取り除かれ、真の平和を得ます。罪との戦い、罪に対する死があって、初めて真実な平和が来ます。神との平和があり、そして互いの平和です。

十字架を素通りした平和は、自分たちの罪をそのまま放置した平和です。罪があるうちに平和などありません。「悪しき者には平安がない。(イザヤ 57:21)」それを平和だ、平和だと言っているところに、災いがあります。「エレ 6:14 彼らはわたしの民の傷をいいかげんに癒やし、平安がないのに、『平安だ、平安だ』と言っている。」

## 1B 剣をもたらす方

イエスは、弟子たちに対して、自分は平和ではなく、剣をもたらすと言われました。「マタ 10:34-36 わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っははいけません。わたしは、平和ではなく剣をもたらすために来ました。わたしは、人をその父に、娘をその母に、嫁をその姑に逆らわせるために来たのです。そのようにして家の者たちがその人の敵となるのです。」

## 1C 平和を妨げる結びつき

イエスは、私たちの家族の結びつきを引き裂くのでしょうか？いいえ、イエスを主とするという時に、それを最も強硬に反対するのは、家族の結びつきだからです。神は、父と母を敬いなさいと命じています。家族の結びつきは尊いものであり、そうみなさないといけません。しかし、イエスを主として心であがめるのに、それが家族とのつながりによって妨げられるのであれば、話は別です。「10:37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。わたしよりも息

子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」イエスが主とならない、その結びつきが自分にとっての主、神になっているのです。そして事実、しばしば、起こることなのです。「イエスの教えはすばらしい。けれども、家のことがあるからといって、この方を主と告白して、従おうとしないのです。

### 2C 真実な平和

真実な平和は、たとえ分裂が家族の中で起こっても、主をあがめることです。それで、もしかしたら、親も兄弟も、同じように主を信じるかもしれません。そうすれば、キリストにある平和の結びつきは、この地上にない何にもかえがたい、貴いものとなるでしょう。キリストにあって平和があり、肉の家族においてさえ絆が深まるのです。

私自身の救いの証しが、これでした。私がキリスト者になるかどうか悩んでいた時に、大学一二年生という、本当に若い時、なぜか、今まで考えたことのないことを考えました。先祖の墓です。父親がその時、自分の兄弟たちのためにも、墓石の無い墓だったので、墓を作ったのです。もちろん受け継ぐのは、長男である私のはずです。そのことと、クリスチャンになることによって裏切ってしまうのではないかと思いました。しかし、先ほど読んだみことばで、決心しました。こう思ったのです。「最大の親孝行は、親がキリストを信じてもらうことだ」と。

案の定、親との確執が始まりました。私が、バプテスマを受けたのを目撃した時は、「イエスが清正を奪っていった」と思ったそうです。そして、いろいろ関係が緊張しましたが、ついに、母が信仰を持ち、父が持ちました。もし、私が妥協していたら、私だけでなく、親も失われていたことでしょう。けれども、妥協しなかったので、主は親にもご自身に導かれたのです。

### 3C みこころに従われる方

ところで、同じように白い馬に乗っている、キリストご自身と、偽キリストの決定的な違いは、どのように勝利しているかにあります。6章2節に、「勝利の上にさらに勝利を得る」とありますね。午後礼拝で詳しく話しますが、これは、かつてアンティオコス・エピファネスというギリシアの王が、政治的に言葉巧みに語り、仲間を増やして人気者になり、そして政治権力で掌握する姿が背景にあります。「ダニエル 11:21-23 彼に代わって、一人の卑劣な者が起こる。彼には国の権威は与えられないが、不意にやって来て、巧みなことばを使って国を奪い取る。22 彼の前では、洪水のような軍勢も、契約の君主さえも一掃されて打ち碎かれる。23 彼は同盟を組んだ後で欺き、少ない人数で勢力を増していく。」

それに対して、イエスご自身も勝利を得ています。5章で読みました、「5:5-6 「ユダ族から出た獅子、ダビデの根が勝利したので、彼がその巻物を開き、七つの封印を解くことができます。」また私は、御座と四つの生き物の真ん中、長老たちの真ん中に、屠られた姿で子羊が立っているの

を見た。」屠られた子羊が、今、よみがえっている。ここに勝利があります。つまり、この方は政治的な策略で権力を得たのではなく、真逆であります。ご自身が父なる神に従われて、自らを捨てて、それで父がこの方を生き返らせたのです。

キリストと反キリストの熾烈な駆け引きが、ユダの荒野での誘惑とゲッセマネの園にあります。「マタ 4:8-9 悪魔はまた、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての王国とその栄華を見せて、こう言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう。」主は、神のみを礼拝するのだと言われて、退けました。しかし、黙示録 13 章に入ったら詳しく説明しますが、反キリスト、獣も同じ誘いを悪魔から受けて、これら王国すべてと栄華を、悪魔にひれ伏すことによって、受け取るのです。キリストは、あらゆる欲を退けて勝利を得られたのに対して、反キリストは世の欲を愛して、勝利を得ようとします。

そしてゲッセマネの園では、イエスご自身の祈りは、血がしたたり落ちるほどの熾烈なものでした。けれどもこう祈られます。「ルカ 22:42 父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの願いではなく、みこころがなりますように。」ご自身の願いではなく、父のみこころに従われたのです。これが勝利なのです。自分の願いを最大限に追及することが勝利だと思っている反キリストに対して、まことのキリストは自分を否まれて、みこころに従われることによって勝利を得ました。

## 2B 悪魔の支配する世

### 1C 罪の中の死

私たちが、平和だと思っているものは、実は、悪魔にそのまま従っているだけにすぎません。「エペ 2:1-2 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。」ちょうど、死んだ魚が、川の流れに逆らわずに、そのまま流されていくように、私たちも罪の中に死んでいる時、この世の流れに従っているだけなので、摩擦が起こらないのです。

### 2C いのちの支配

しかし、キリストは死なれ、よみがえられました。そこで、戦いが起こりました。事実、よみがえったのですから、この方が神の御子であることが公に示されたのです。自分が死んで、この方に生きていただくか、それとも、この方を自分の思いから抹殺して、自分を生かすしかなかったのです。このようにして、いのちが始まると、サタンの支配の中に戦いを挑んでいることになり、いのちの支配がは侵入しているのです。「ロマ 5:21 それは、罪が死によって支配したように、恵みもまた義によって支配して、私たちの主イエス・キリストにより永遠のいのちに導くためなのです。」

### 3A 子羊による封印

#### 1B 偽りによる裁き

#### 1C 不法の人の現れ

しかし、終わりの日の始まりは、偽りから始まります。偽のキリストが現れて、平和を一時的にも実現させて、人々が信じるようになります。それで、不法の人が滅びる時に、この者を信じた者たちも、自分が従っていくので、滅んでいくことになるのです。悪魔とその手下のために造られた地獄に、投げ込まれることになるのです。

#### 2C 偽りへの信頼

よく考えれば、この白い馬の人は、子羊が封印の一つを解いたことによって、出てきました。つまり、子羊なるキリストの主権によって、反キリストが活動するということです。なぜ、主が、ご自身が最後には滅びず、世界に荒廃をもたらす人物を敢えて、表に出させることをするのでしょうか？それは、彼らが福音の真理を受け入れなかったからだ、パウロがテサロニケ第二で話します。「Ⅱテサ 2:9-12 不法の者は、サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。彼らが滅びるのは、自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったからです。それで神は、惑わす力を送られ、彼らは偽りを信じるようになります。12 それは、真理を信じないで、不義を喜んでいたすべての者が、さばかれるようになるためです。」本物を受け入れなければ、偽物をつかまされるのです。本物、福音の真理を拒んだので、自分の救いは、福音以外のところに求めます。それで、反キリストの偽りを鵜呑みにしていきます。

#### 2B 福音の真理への愛

ですから、今は惑わしの時代です。この 6 章 2 節が、その惑わしを大きく教えています。同じ白い馬なのです。そして、キリストは平和の君なのです。だから、平和の人してやってくる政治指導者が、救世主だと思っておかしくないのです。似て非なるもの、という言葉がここに当てはまります。そして、その決定的な違いを説明させていただきました。キリスト抜きで平和を求めようとしています。特に、キリストの十字架抜きの平和です。自分の罪に向き合わないところの平和です。同じ平和でも天と地が違うように違います。

テサロニケ第二 2 章でパウロが言っているように、「自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったから」ということです。愛をもって、というのは、この真理こそが自分にとって最も大事、ということです。いろいろな大事なことがあっても、福音の真理を優先させます。それが、時には心が刺さるような、痛みをとまなうことがあります。大きな犠牲を払わなければいけないがあります。狭い道なのです。けれども、その道を歩むのを避けるのであれば、残りは偽りの平和しかないのです。パウロが言った、「しかし、私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが、決してあってはなりません。(ガラ6:14)」であります。このことによって、私たちが滅びに向かわせる、反キリストの霊から守られるのです。